

令和3年度ココロねっこフォーラム（要旨）

令和3年11月17日（水）長崎県庁会議室

【パネリスト・総評】※敬称略

山本 道雄（長崎県PTA連合会会長）

松崎 邦彦（長崎市立横尾小学校校長）

数山 有里（親子いこいの広場もくもく代表）

三谷 亨（松元リカバリークリニック 精神保健福祉士、公認心理師）

浦川 末子（長崎県更生保護女性連盟会長）

【司会・趣旨説明】

音和 由紀子（長崎県こども未来課指導主事）

宮本 幸成（長崎県青少年育成県民会議事務局長）



【テーマ】

子どもが育つ環境をどう改善するか？～子どもの居場所～

【趣旨説明】

宮本（長崎県青少年育成県民会議事務局長）

居場所が重要視されはじめたのは、不登校問題を鑑みて文部科学省が心の居場所の必要性を指摘したことに始まる。

～内閣府令和3年度子ども若者白書より子ども若者インデックスボードの紹介（別紙参照）～
このデータの子ども・若者は13歳から29歳を対象としている。

別紙⑨～⑪のグラフからは、居場所の数が多いと自己肯定感、今の充実感、将来への希望等が高くなり、前向きな自己認識と居場所の数は相関していることが分かる。別紙⑬～⑮のグラフからは、児童生徒の自殺者、いじめなど重大事態、児童虐待の相談対応数、不登校児童生徒数、SNSでの被害児童数が増加していることが分かる。

ココロねっこ運動は子どもたちの自ら伸びる力を育てる環境づくりを目指しているとも言える。子どもの立場に立っての家庭、学校、地域のこういった居場所を目指すことが大切なのか、みなさんと一緒に考えたい。

【ディスカッション①】

音和（司会）

家庭、学校、地域、専門家から見たこども居場所の現状についてお話しいただきたい。

山本（長崎県PTA連合会長）

県P連では家庭教育の充実を主な柱としている。我々親世代と違う点は核家族化が進んでおり、共働きによって、家庭で親と子どもが接する機会が昔と比べ少なくなっていると感じている。また、我々の子ども時代と違いインターネットの普及により様々な影響を受けている子どもの気持ちを、大人があまり理解できていないという面があると思う。

P T Aでは親が学ぶ場を設けていて、親が集まり悩みを分け合うことで家庭での子どもとの関わりについて解決はできないが、糸口が見つかるよう活動を行っている。

松崎（長崎市立横尾小学校長）

修学旅行の帰り際、子どもに「帰ったら何を？」と問うと、「ゲーム」という返事が返ってきて驚いた。子どもたちには「仲間」「時間」「空間」3つの「間」がなくなったと言われている。このことにより、インターネットの利用時間が増えインターネット空間が子どもの居場所になっているのではないかと思う。

令和2年度に小学生の暴力行為が極端に増えている。加えて、小学校では不登校児童も増えている。原因の一つは、人と人との関わりがうまくできないことにあるようだ。最近、人とコミュニケーションを取るのが不得手な子が増えていると感じる。もう1点は、発達の課題である。特別支援教育が必要な子が増加している。

このような子どもの居場所を作り、社会性を育ててあげることも重要ではないかと思う。こういった学校の課題を何とかしていきたい。

数山（親子ふれあいの広場もくもく代表）

佐世保で親子の居場所づくりの一環として、子ども食堂をしている。いろいろな人と交われるのが子ども食堂で、県内でのほとんどの子ども食堂は地域の交流の場となっている。

ただ、緊急事態宣言で様相が一変し、学校は休校となり親子の居場所がなくなった状況の中、居場所を提供してきた。コロナ禍の中、公園に遊びに行っていた子どもが、1時間遊んだだけで3人の大人から注意されたという。子どもたちもストレスを感じていた。

コロナ禍で孤立した子育て世帯が多かったので、なるべく対面で話せる場を設けたり、ZOOMでつながるなどの活動に取り組んだりした。企業の協力も得て食材などを配る活動も行った。今も、つながり続けることを大事にしている。

三谷（松元リカバリークリニック 精神保健福祉士、公認心理師）

今回依頼をいただき、すぐに浮かんできた忘れられない話がある。

20年以上前の話だ。学校が苦手な、保健室には行けていたが教室には入れない子どもがいた。学校の先生は「教室へ行こう」と誘い、保護者も登校を促していた。みんな良かれと思ってやっていたことだが、その子は通学途中の公園で自殺した。その子にとっては居場所が保健室だったのだ。居場所がないと人間は自殺してしまう。

最近、学校がつまらない、勉強が面白くないと感じる子や精神的に過敏な子などが学校に行けないという傾向がある。大人たちからは「ゲームにハマっているから、どうにかしてほしい」という相談が多いが、よくよく聞くと子どもの居場所がないことが分かる。

そもそもゲームには自己肯定感、自己有用感を実感できる仕掛けがある。仲間と一緒に目的を共有し、それぞれに役割があり、お金と時間をかければ努力が実る。そのようにできているゲームで称賛されると脳内にドーパミンが分泌されゲームから離れられなくなる。そして、ゲームやネットが居場所化する。本質的にゲーム依存の相談は居場所のなさにあると思う。

山本

子どもには子どもなりの社会がある。大人の心の持ちようで子どもにかける言葉も変わってくると思う。部活動の指導者に、「大人は『子ども』を経験しているが、子どもは『大人』を経験していない。」同じ指示を出されても、子どもは、自分の経験だけでは三者三様の捉え方をするから、そこ

を踏まえて接することが必要だ」と言っている。

松崎先生がおっしゃった3つの間で、「時間」、「空間」は大人の問題である。大人が心に余裕を持って、まず大人社会を見直し、子どもの社会を理解する努力をするのが大事だと思う。

松崎

GIGAスクール構想で生徒一人一人がタブレットを持ち、来年度を目途に自宅でのオンライン学習ができるようになる予定で、学校に行かなくても勉強できるようになる。しかし、懸念も感じている。本来学校教育とは、学校内でのつながり、役割を持つこと、子どもたちの生きる力を育てることだが重要だと思う。今後パソコンなどは利用できないといけませんが、人との関わりの中で問題を解決し、社会を生き抜いていく力を育てていかなければと思っている。

また、子どもの居場所の中でも、ネット内の子どもの居場所を健全化する必要があるのではと感じる。つまり、メディアリテラシーを育てる必要がある。子どもの居場所としてのネット空間についても皆さんと考えたい。

数山

私が思う居場所というのは、役割を持つこと。子ども食堂では、一人っ子の子どもも年下の子どもも面倒を見ることで役割を自覚できる。家にも居場所がなく、学校にも地域にも居場所がない子にとっては、子ども食堂がその子の居場所になっていると感じる事例があった。居場所は大人が提供するものではなく、子どもたちが自分の居場所だと感じられることが大切だと思う。子どもによって、合う合わないはあると思うので、居場所を選択できるようにすることが重要ではないか。

三谷

居場所には物理的な居場所と、心理的な居場所感の2つがある。大人の課題として重要なのは、どれだけの居場所を用意できるか、心理的な居場所感を担保できるかだ。

自己肯定感の話になるが、自分が否定されない、自分が自由に発言していいというのが居場所感。人の役に立っているという自己有用感。そして自分の力が通用する自己効力感。この3つがそろって自己肯定感が強まるといわれている。

(休憩の後、サブセッション～グループディスカッション～を実施)

【ディスカッション②】

宮本

本来は肩肘張って居場所を作らないといけないと要求される社会ではないほうがいいとも思うが、会場からの意見をもとに、パネリストから意見を伺いたい。

山本

気になったのが「対話」という意見である。PTAにもワクチン接種に対する問い合わせがあったが、保護者が正しい知識を得る努力をして子どもと対話して決めてもらうようにした。日本PTAの研修で欧米と日本のタブレットの使い方の違いがあるという話を聞いたことがある。日本の子どもたちは大人に閲覧した内容を言わないが、欧米はネットを閲覧した内容を大人に話し、そこに対話が生まれると聞いた。対話があることで、大人は、子どもがどう思っているのか知ることができる。

松崎

宿泊学習での竹割りと箸作り体験をご紹介したい。子どもは上手くできなくてもみんな楽しんでいて、割り箸は、とても短くて使えないようなものを作っている、とても喜んでいて。こういう直接的な体験が必要だと感じた。

子どもが体験できる場を作ってやるのは、大人や地域の役割だと思う。ある程度スリルがある場を設けることで、子どもたちは喜ぶのかなと思う。一方で、甘やかしばかりでもいけないと考えている。学校という場は子どもたちにとって厳しい場面もあるかもしれないが、そういった場を経験することも子どもが育つうえでは必要だと思う。

数山

私が子ども食堂をしているのは、自分が子育てを上手にできないし、他の親御さんに頼りたいと思っているから。多くの大人がいることで、自分が発見できない子どもの良さを、他のお母さんが発見してくれる。そういった体験の積み重ねの一つ一つが自己肯定感も高めてくれる。

子ども食堂はいろんな人たちがいてもいい場であってほしい。今ママたちは葛藤しながら子育てをしている。また、やってあげるではなく、対等な関係性で付き合い、みんなで支え合うことが理想だと思う。

三谷

子どもたちが安らかに過ごせる場所を提供する義務が大人にあると思う。

「対話」という意見もあったが対話には配慮が必要。大人がフラットに話しかけているつもりでも、子どもにとっては力関係から五分ではない。大人が下がる必要がある。子どもの本音を水に例えると、水は低いところへしか流れない。上から言っても上には流れてこない。このことを心に留めていただいて、子どものニーズに合わせた場を作ることが必要だと思う。

個人的にはどの居場所につながるかではなく、誰とつながるかが大事だと思う。この人だったら安心できるという1セットで考えていかなければならないと思う。

音和（司会）

子どもの居場所を考えると、大人側に心の余裕が必要だと思うが、ただ大人も余裕を持つのは難しいところがある。そこで子育て世帯を見守る優しい地域の目があるというのが大切なことになる。県としても住みやすい、子育てをしやすい地域を目指していきたい。

【総評】

浦川（長崎県更生保護女性連盟 会長）

居場所のキーワードには自己肯定感が大事だが、その源流は愛着形成だと思う。

令和2年女性の自殺者が増えた。DV・虐待も増えた。立ち直り支援もしているが、居場所がないという訴えが聞こえてくる。

ココロねっこ運動の趣旨である、「大人が変わる」というのは、他人事ではないということを実感したい。また、子どもも若者も、高齢者も女性も孤立していることを共通の理解としたい。

大人が変われば、子どもも変わるという、この精神は不変不朽のものである。

ある方のコメントに情報共有、啓発だけの団体は先細りするということがあった。過渡期の社会においては実践の拡大しかない。連携をして裾野を広げる必要があると思う。行政の仕組みと住民の支え合い活動は両輪であると言われている。大人の自発的な活動から、大人も子どもも居場所作りにつながる。

パネリストの意見に教え鍛えなければ育たないという意見があった。人は教えられないことは一生知らない。可愛がってばかりで、やってはいけないことを教えなかったというのではいけない。可愛いということと、教えないことは違う。

周りの大人の力は絶対に必要。子育て世帯を支えないといけない。とにかく大人たちが子どもたちへ温かい視線を注がないと、将来の日本が減ぶかもしれないというメッセージで終わらせていただきたい。 【終了】